

# うたとかたりの対人援助学

## 第35回「沖縄の子守唄とわらべうたを聴く」

鵜野 祐介

### はじめに

今年(2026年)2月25日(水) - 26日(木)、沖縄県那覇市を訪ねて、長年子どもたちに伝承の子守唄やわらべうたを手渡す実践を行っておられる石川キヨ子さんと平良京子さんにお会いする機会を持った。

ネット空間に囲まれたIT情報社会に生まれ育った今日の子どもたちや若者たちに、地元沖縄で伝承された子守唄やわらべうたをどのようにして継承しようとおられるのか。お二人の実践には、全国各地で同様の取り組みに悪戦苦闘しておられる多くの方がたにとって、参考になると思われる点があいづつもあった。ごく一部だが、ここに紹介してみたい。

### みどり保育園とガジュマルの樹木

2月26日(木)の午前9時30分、沖縄県那覇市の首里城公園から程近い石嶺地区の住宅街に「みどり保育園」を訪ねた。元園長の石川キヨ子さんが、園庭の一画に聳える巨大なガジュマルの樹木と一緒に迎えて下さった。



多数に分岐した幹が絡まり合いながら枝のように手を広げ、そこから無数の気根が垂れ下がっていた。子どもたちが木登りをしたり、鬼ごっこや隠れん坊をしたりするのに打ってつけの遊び場だという。一方で、暗がりには妖怪キジムナーが棲んでいそうな気配もあった。

第二次世界大戦末期の「沖縄戦」で、焦土と化したこの地で生き延びた生命力を持つこの「みどり」の樹に惹かれて、キヨ子さんは沖縄が本土復帰した1972年に、「みどりご(嬰兒)」が集う「みどり保育園」を始めた。そして、沖縄の昔話やわらべうたを取り入れた保育実践を行ってこられた。



(石川キヨ子さんと筆者)

### わらべうた遊びの設定保育

この日は、キヨ子さんが保育士さんと一緒に、3歳児クラスから5歳児クラスまでの約60名が参加する「わらべうた遊び」の設定保育の時間があり、沖縄地域児童文学協議会事務局長の山川喜美子さん、山川さんの姪御さんと一緒に見学させていただいた。

「うちなーぐち（沖縄言葉）」のわらべうた遊びの楽しさを身体じゅうで表現する園児たちや、一緒に跳びはねる保育士さんたちやキヨ子さんのエネルギーな姿に圧倒された。

歌い方や遊び方は、キヨ子さんが、那覇わらべうた会の皆さんと一緒に長年かけて試行錯誤しながら作り上げたものだという。コダーイ・メソッドは参考にしなかったそうだ。「ド・ミ・ファ・ソ・シ」という琉球音階の歌が多いが、「ラ・ド・レ・ミ・ソ」という民謡音階の歌もあるし、西洋音楽の替え歌も交じていた。

なーみ なーみ （波よ波）  
わんわちゃくり （私をくすぐれ）  
ゆーちぬさーちぬ （ユーチヌ崎の）  
鼻もーもー （鼻もーもー）

——海辺で子どもたちが波とたわむれている様子うたにしている。「花いちもんめ」のような2列隊形で向かい合って、一方が前進し、他方が後ずさりする（高江洲義寛『おきなわのこどもあそびうた』那覇わらべうた会 2002 年を参照、以下同様）。

あみあみ  
雨雨ふあーふあー （雨を食べよう）  
雨雨ふあーふあー （雨を食べよう）  
なら子や やーしゃてりや  
（私の子はお腹がすいている）  
牛まん馬まん （牛や馬に乗って）  
ガンカラ ガンカラシー  
沖縄上り 大和上り （沖縄へも日本へも）  
ぼんぼん ぶりかましてい（桃をもいで食べて）  
くーよー （来なさい）  
雨雨ふあーふあー （雨を食べよう）  
雨雨ふあーふあー （雨を食べよう）

——雨が降ってきた時に「早くやんでほしい」という意味の歌だが、「雨を食べよう」といって、むしゃむしゃ食べる真似をする。

こーじゃー馬小<sup>んまぐわ</sup> （こーじゃー馬よ）  
かたばる  
瀧原かいど （瀧原(地名)へ行くんだよ）

んま くらうー  
馬ぬ鞍置してい （馬の鞍を置いて）  
チャンチャン馬小<sup>んまぐわ</sup> （チャンチャン馬よ）  
瀧原かいど （瀧原へ行くんだよ）  
ちんしけー<sup>う</sup>打ち割<sup>わ</sup>てい（ひざを打ち割ってしまって）  
ミハツハ ミハツハ  
じゃんけんばい

——「こーじゃー馬小」とは、灰色まだらの小さな馬のこと。「チャンチャン馬小」とは、張り子のオモチャの馬のこと。「ミハツハ ミハツハ」とは、馬のいななきを模した掛け声のこと。まずはじめは、全員バラバラで、歌に合わせ跳びはね、じゃんけんで負かしたい子のところへ寄っていきジャンケンをする。負けた子は勝った子の後ろにつながり、再び歌と動作を繰り返す。こうして、最後には一列につながってしまい、さらに歌と動作を繰り返し、今度は先頭と最後尾の子とジャンケンをし、最終的には一つの輪になる。

#### 子守唄でクールダウン

子どもたちのテンションが最高潮上がったところで、キヨ子さんは子どもたちに板張りの床の上に寝転び、目を閉じるように指示した。それから八重山の子守唄「月ぬ美しゃ<sup>かい</sup>」を歌った。「ホーイチョーガー ホーイチョーガー」と、ゆったりとしたリズムで繰り返した。ほとんどの子が目を閉じて、身体をごろーんとしていた。

「興奮したままで終わると、暴れまわったり走り回ったりする子が出てきます。そうならないように、最後に必ず子守唄を歌って、心と体を鎮めてあげてください」と、後で話して下さった。わらべうたと遊びと子守唄が見事に融合した保育実践だった。

かい どうかみーが  
月ぬ美しゃ 十日三日（月の美しいのは 十三夜）  
みやらび美しゃ<sup>どうなな</sup> 十七つ  
（乙女の美しいのは 十七歳）  
ホーイ チョーガ

あ うかつき ゆ  
東りから上りおる 大月ぬ夜  
（東から上がる 大きなお月様）  
うきな や い ま てい  
沖縄ん八重山 照らしょーり

(沖縄も八重山も 照らして下さい)

ホーイ チョーガ

(高江洲 2002:39)

「耳切坊主」の案内板

みどり保育園を後にして、首里城公園の北側に位置する「大村御殿」跡を訪ねた。現在、御殿の周囲の石垣だけが残っており、広い道路に面した場所に「耳切坊主」の案内板が立っていた。次のように紹介されている。

「ここは、北谷御殿（のちの大村御殿）跡地で、わらべ歌「耳切坊主」の舞台となった場所です。昔、妖術を使った悪事をはたらく黒金座主（クルガニゼーシ）と呼ばれる僧侶がいました。噂を聞いた国王は、弟である北谷王子に成敗を命じた。黒金座主は、北谷王子に耳を切り落とされ、恨みを抱きながら殺され、屋敷の南東角の辻（うふかじまやー）に埋められてしまいます。それからというもの、大村御殿の角には、黒金座主の亡霊が小坊主たちを引き連れて現れるという噂が立ち、また、大村家に男子が育たないのも黒金座主の祟りとされました。そのため、男子が生まれても亡霊に狙われないように「大女子（ウフィナグ、大きな女の子）が生まれた」と言って祟りを避けるようになり、その風習が琉球全土に広まったと云われています。（亡霊云々は別として登場人物は実在しており、十八世紀頃のこととされます。）」

平良京子さんの歌う「耳切坊主」

「耳切坊主」は子守唄の中で最もポピュラーなもので、沖縄全島に流布しているが、この日の午後お会いした平良京子さん（沖縄県子どもの本研究会顧問）



が歌って下さったバージョン(類歌)を記しておく。

ハイヨー ハイヨー ハイヨーハイ

ゆさんてまちかい  
夕市 うーいーね

(夕方になって、市場へついていくと)

うふむらうどうん うじょう  
大村御殿ぬ御門なかい (大村御殿の門に)

みみちりぼうじ た  
耳切坊主ぬ立っちょんど(耳切り坊主が立っているよ)

いくたい  
幾人幾人立っちょみせが (幾人幾人立ってますか)

みっちゃいゆたい  
三人四人立っちょんど (3人も4人も立ってるよ)

ぬう ぬう む  
何とう何とう持っちょみせが (何と何を持ってますか)

うらな かな  
鎌ん刀ん持っちょんど (鎌や刀を持ってるぞ)

しくぐわ ほうちゃあくわ  
小刀ん包丁ん持っちょんど

(小刀や小さな包丁も持ってるぞ)

な わらべ みみ  
泣ちゆる 童ぬ 耳グスグス

(泣く子の耳をグスグス切るぞ)

んみんが んみんが む  
んみんが んみんが 守いしかさわ

(お姉さんがお守りしてあげましょう)

じょうやく かちやく  
定役 書役 しみゆんど

(首里王城の定役人や事務役人に出世させましょう)

とあ やまとう  
唐ん 大和ん あっかさや

(唐や大和にも遊学させましょう)

したじわ さばぐわ  
下駄小ん さば小ん くますんど

(下駄やぞうりも買ってあげましょう)

ハイヨーハイヨー 泣かんど泣かんど

(だから 泣かないで 泣かないで)

なかなか寝つかない赤ん坊に音を上げて、怖いお話を聞かせて何とか寝かしつけようとするもので、現在 50 代である山川さんの姪御さんも、幼い頃によく聞かされて怖かったそう。

それから彼女は次のようなエピソードも語ってくださった。同じ高校に大村家の末裔の男の子がいたのだが、自分も幼い頃は「耳切り坊主」の祟りを避けるために女の子の格好をしていたという。そのため、写真がほとんど残っていないのだそう。少なくとも今から 50 年ぐらまでは「耳切り坊主」伝承の習俗が息づいていたのだ。

英国スコットランドにも、19 世紀頃まで上流階級の家では男子が生まれると、邪霊に連れ去られてしまう危険があると女装をさせる習俗があった。今も残る当時の富裕な家庭の子どもの肖像画はほとんど

ど女子の容姿である。洋の東西を超えて、同じ発想が受け継がれてきたのだ。

ともあれ、子どもの心と身体を安らかにさせる「月ぬ美しゃ」、子どもの心をざわつかせる「耳切坊主」、二つの子守唄を上手に使い分けて歌い継いできた沖縄のアンマー（お母さん）たちの知恵に感服する。

### 平良京子さんの手遊び唄と早口言葉

平良さんに沖縄の手遊び唄や早口言葉をいくつも実演していただいた。ここにはその一部を、しかも歌詞（唱えことば）だけなのが残念だが、紹介しておこう。

#### <手遊び唄>

1と1で いちゃりばちよーでー（出逢えば皆兄弟）  
2と2で にーぶいびにーぶい（眠たい眠たい）  
3と3で さーらないさーらない（早く早く）  
4と4で よんなーよんなー（ゆっくりゆっくり）  
5と5で ゴーヤーシリシリ（ゴーヤーチャンプル）  
いやっさっさ おどりましょ

にょよーにょよー  
2・4・4 2・4 （「にょよー」(童名)よ にょよー）  
じゅーしーやー  
10・4・8 （雑炊が）  
にーとーくーとー  
2・10・9・10 （煮えているから）  
くーよーや  
9・4・8 （来なさいよ）  
2・4・4・2・4 （にょよー にょよー）

いっちくたっちく （一つ二つ）  
じゅうにが ふいが （十二に 巻いた）  
ちくむく ちんぼらが （不明 チンボラ貝が）  
うどうんぬ くしんじ （お屋敷の後ろの方で）  
ふーるが やい （糞をたれた）

——「ずいずいすっころばし」のような指遊びのうた。4～5人のグループで輪になり、皆両手を軽くにぎり突き出す。誰か一人が親になり、歌に合わせて皆のこぶしの穴に人差し指をさし込んでいく。おしまいの「ふーるがやい」であたって人は手を引っ込め、さらに同じ要領で続けていき、最後に手の残った人が鬼になる（高江洲 2002：(13)より要約）。

#### <早口言葉>

なまむくるまー むるぐるぐるま  
（今の車は すべてゴム車だ。）

しちぐわちぐんぼー ぶんぐんぼー  
（7月の牛蒡は お盆の牛蒡だ。）

ちびぬあくびや にじていにじらん  
（おならは我慢しても我慢しても我慢できません。）  
すばにうるしんか 鼻うすていたぼうり  
（皆さんどうか鼻をつまんで許してください。）

長年、那覇市内で公共図書館司書を勤め、沖縄県子どもの本研究会顧問でもある平良さんは現在、沖縄キリスト教短期大学でゲストスピーカーとして、保育士を目指している学生たちに沖縄の子守唄やわらべうた遊びを教えている。とても熱心に受講してくれ、授業後の感想をたくさん書いてくれる。「うちなーぐち(沖縄言葉)」で歌ったり遊んだりするのが、学生たちは大好きだと実感できるという。



（平良京子さんと山川喜美子さん）

#### おわりに

2019年の火災で焼失された首里城正殿は、今年秋に復元作業が完成するとのこと。その暁にはぜひ訪沖して、首里城公園でゆっくり過ごし、みどり保育園にもお邪魔したいと考えている。

今回の沖縄でのフィールドワークにあたって、沖縄の児童文学や児童文化研究の専門家・齋木喜美子さん、沖縄出身の子ども文化研究者・上林梓さんに事前情報を教えていただいた。また現地では、石川キヨ子さん、平良京子さん、山川喜美子さん、山川さんの姪御さんに大変お世話になった。全ての皆様に、紙面をお借りして謝意を表したい。